

## 第 61 回 IAC プラハ大会参加報告

東京大学大学院理学系研究科天文学専攻修士課程 1 年  
梅畑豪紀

今回、第 61 回 IAC プラハ大会への参加を通して、私は大いなる刺激を与えられる結果となりました。JAXA 派遣学生の一員であったことを誇りに思うと同時に、喚起された行動欲を次の活動へと繋げていきたいと願っています。

現在、私は大学院で天文学を専攻しています。その為、必ずしも IAC の内容は普段の研究内容と密接に関係したものではありませんでした。一方で、昔から宇宙開発を含め宇宙全般に興味を持っていた人間としては、自分の研究分野という視点にとらわれることなく見れば非常に興味深いテーマが並んでいました。そこで、自分の専門と少し分野が異なることを逆手にとり、普段学べないことをできるだけ食欲に吸収しようというモチベーションで IAC に臨むことにしました。

私が参加した IAC のイベントの中で最も印象に残っているのは ISZ (国際学生ゾーン) における JAXA Day のプレゼンテーションです。自分の中で、このプレゼンにはいくつか重要な意義がありました。まず、国際会議における発表であるということがありました。また、私は他に自分の研究発表の予定はなかったため、ここでのプレゼンが唯一の機会でした。つまり、この発表をいかに有意義な時間にできるか、それがこの派遣プログラムを成功と呼べるか否かを分ける鍵の一つでした。5分という短い時間の発表を終えて振り返ると、総合的には及第点を与えてもいいかなと自己分析しています。準備段階に十分な時間をかけることができず改善の余地がある一方、発表本番は聴衆に向かって伝えることが相応に達成できたのではないかと考えています。

もう一つ、忘れられない時間としてプラハ日本人学校での授業が挙げられます。この派遣を通して、一番の達成感を感じたのはこのときでした。小学校中学年を受け持つ5人で夜遅くまで準備を重ね、当日子供達の弾ける笑顔に出会えたときは本当に嬉しかったことを覚えています。私はこれまで天文学をフィールドとして高校生を中心に普及、教育活動に携わってきましたが、小学生の子供達に先生として接する、という機会はなく新鮮な経験でした。学年があがってくるに連れて知識を与える、という比率が高くなってきますが、やはり体験をすることの大事さを感じました。一方で、体験をさせる側の準備の苦労も

味わうことができたように思います。

プラハでは沢山のひとと出会いましたが、思った以上にバラエティに富んでいたな、というのが自分の中の感想としてあります。もう少し専門性の高い、限られた分野の会議を想定した部分が少なからずあったのですが、それはいい意味で裏切られた感じしています。IAC 自体が幅広い領域をカバーする会議であることに加え、ISEB のイベントを通して様々なバックグラウンドを持つ人と出会うことができました。天文学をやっている人も自分の他にもいましたし、多岐にわたる分野の人間が集っていたことは言う迄もありません。

今回の学生派遣プログラムを俯瞰して見たとき、自分の視野が広がっていったように思います。いや、その表現は正しくないのかもしれませんが。自分の生きている領域が狭小であることを認識できた、という方が適切な気がします。プログラムに参加する前、そして参加した後、私の主戦場は天文学の研究の現場です。自分が望み、たどり着いた場所であり、天文学の世界で頑張っていきたい、その方針に変化はありません。ただ、IAC で過ごした時間はそこにいくつもの魅力的なオプションを与えてくれました。国際的な場で活躍できる人間になりたいと願ってはいても、まだまだ課題は山積していることを身をもって知りました。同時に、さらに一步、海外の学生の輪に入っていくことができればもっと相互に有益な関係になれる手応えも感じるようになりました。自分の携わっているアウトリーチ以外に、様々な活動が存在していることも教えられました。いくつか例を挙げましたが、上述のように、この IAC は私にいい意味で危機感を与えてくれたと思います。これを一過性のものにせず、今後の研究生活、あるいは研究に基づいたアウトリーチ活動に繋げていきたいと考えています。